

勝林寺寺報



本願名号正定業

至心信楽願為因

成等覚証大涅槃

必至滅度願成就

コロナウイルスが世界中に広がり、多くの人が亡くなり、多くの人々が苦しみ、世界中が怯えています。六十年余りを過ぎてもう人生の終盤になる中で、大方の出来事は経験し、もう死ぬまで珍しい出来事に会うこともなさそうに感じていましたが、不測の事態は次々に起るものです。人は経験則の中で、今この状態が起っている、こういう結果となっているのは、こういう原因で起こってきたのだ、という原因と結果の関係が明らかになっていることは予測ができます。そして、好ましくない結果が目の前にあるならば、その結果を引き起した原因を見つけ、取り除き改善しようとします。こんなことをすればこんな結果になるという、一度経験した痛い思いは、次の経験に反映されてしまいます。しかし、その原因が今までに経験したことのないものであればあるほど、対応が分からず、結果を予測できず、不安になります。

毎日テレビニュースの画面に現れる白黒写真のコロナウイルスは何の因果で生まれてきたのでしょうか。一つの結果には必ずそれを起した原因がある、何もないところに果は生じないというのが仏教の基本的な考え方です。それに加えて“縁”的重要性を示すのも仏教です。実は種子から生まれますが、いくら沢山の種があっても同じだけの実がなることはない。一粒の種が土に落ち、水を得て、光に育まれて育つて初めて果実となる。一粒の種をはぐくむ土・

父の種があり母の胎盤の縁で育まれ、私というものがある。こうした因縁を正しく知ることが大切なのでしょう。

科学も今総力を挙げてコロナウイルスの脅威に立ち向かおうとしています。地球全体を覆う巨大なデーターにアクセスし、スーパーコンピュータによる高速情報処理によって分析し、原因究明、未来予測、危機回避を日夜試みています。それでも日々不測の事態が発生し、先が見えません。因と果を取り持つ縁を解き明かすには、いくらめざましい進歩を遂げた科学技術でも、今のところその持つ情報の量と処理スピードでは解明に程遠いようです。科学技術が一生懸命努力して因果の法則を解き明かすことも知恵でしょう。知恵とは結果と原因、そしてその間にある複雑な縁を正しく把握して知る力です。

仏とは森羅万象ありとあらゆることの因果の道理を把握する知恵を獲得したもののことです。阿弥陀様はこの知恵を獲得して仏になるのに五劫の時が必要であったといわれます。そして一切衆生の救済の因と果を見つけ出されたということをすればこんな結果になるという、一度が、お正信偈の今回のこの部分です。本願名号正定業「至心信樂願為因」とは、名号と信心が原因であることを示し、成等覚証大涅槃「必至滅度願成就」はその結果一切衆生は必ず仏になれるといわれています。この因果の道理を聞かせていただき喜ばせていただくのが私たちの信心であり、科学の知恵を大幅に超えた智慧なのであります。

コロナについて日々考えることは大切です。しかし私たちの今生の命は時代・社会・コロナに関わらず必ず死して終わってしまいます。まず

（文責 住職）

仏教婦人会総会は中止いたしました

四月号でご案内しておりました「仏教婦人会の総会」は、コロナ感染拡大を受けて、やむなく中止とさせていただ

き、関係各位に急遽ご案内をさせていただきました。

降誕会は、寺族のみで勤めさせていただきます。

五月二十二日に予定しております

「お知らせ」親鸞聖人の誕生をお祝いする「降誕会」は、コロナの感染状況の先が見えず、不安が解消されませんので、寺族のみでお勧めさせていただきます。了承ください。

二六日（水）みのりを開く会

※寺族のみにて勤修（敬称略）

五月 勝林寺 予定

二一日（日）永井 淳宅 三回忌
三日（月）坂本政司宅 忠明法要
三一日（土）勝林寺 降誕会

四月号でご案内しておりました「仏教婦人会の総会」は、コロナ感染拡大を受けて、やむなく中止とさせていただ

き、関係各位に急遽ご案内をさせていただきました。



金魚十八匹

年齢不詳。子どもが夜店ですぐつきました。大きいものは、二十センチ近くあり、とても金魚とは思えません。そんなのがコロコロ。ずっと元気です。

猫（ふじ子）

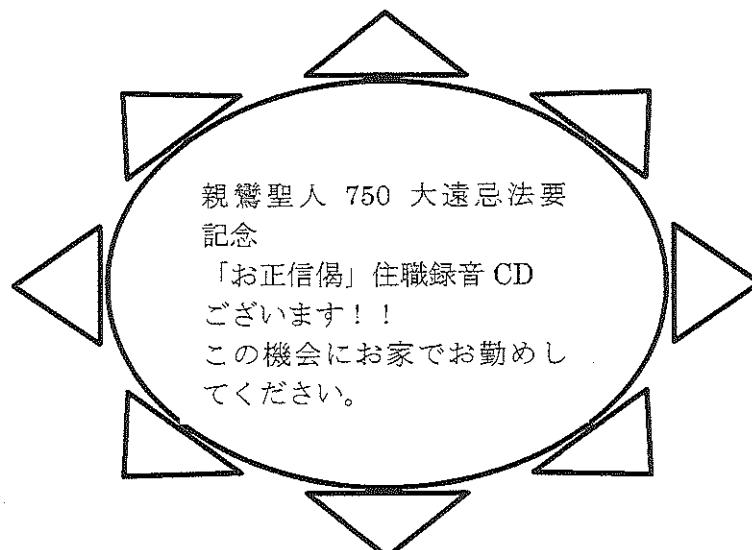
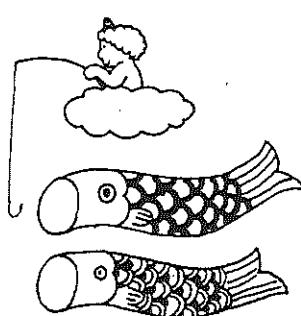
五月の藤の花が咲くころ、十三才になります。猫の中では結構高齢でしようが、相変わらずかわいい顔をしています。左手で引き戸を開けるのが上手になりました。

鳥骨鶏

五月二十日で五才になります。いろいろあります。今は六羽。毎日六羽で一つ卵を産みます。毎日餌をあげる私にさえ怖がり、なかなかれてくれません。

犬（カール）

六月で三才になります。庭のサンダルをかんだり、金魚の池に飛び込んだりするいたずらはしなくなりましたが、やっぱりやんちゃです。でも、とても賢いです。



（敬称略）

教えを学ぶ

敗戦後の日本の社会状況はめざましい変わりようですが、その大きな変化のひとつに、人間関係における断絶ということがやかましくいわれています。家庭では親と子の会話がなくなり、学校では教師と生徒の信頼関係が薄らぎ、また世間では人間と人間との間がしだいに疎くなってきた、というのが、今日の社会の一般的な状況のようです。都會には毎日毎日人があふれでおります。電車もバスも満員ですし、駅やデパートはいつも雑沓しております。しかしながら、人間はこんなにあふれておりますが、そこにはまったくといっていいほど、人間と人間との出会いはなく、対話も成り立つてはいません。電車やバスの中で、人々はおたがいに袖すり合い、顔を見合わせますが、みんな黙りこくつたままです。まして雑沓の中では、けんかこそ生まれ、人間と人間との対話が生まれてくるはずもありません。かくして都會には人間があふれていますが、都會人はまたおたがいに一人ぼっちなのです。群衆の中の孤独、それが今日の都會に住む人々のすがたでもあります。そしてそのような傾向は、今日では農村や漁村でも見られるように思われます。いままで、さまざまな地縁を通してかたく結ばれていた農漁村の社會も、最近の労働条件の変化により、人々はしだいに土地ばなれをして、人間関係もくずれてゆき、おたがいにだんだん疎遠になりつつあるのではないでしょうか。

ある雑誌にこんな話がのつておりました。東京の街角の公園のベンチに、朝から座つたまま動こうともしない一人の老人がいましたそばによつてみると、この老人は自分の背中

に一枚の紙きれをくつつけておりましたが、
それには、

己に願ひはなくとも

と書いてあつたというのです。聞いてみるとこの老人は近くの田地に住む息子夫婦にひき

とられて養われている人であります。息子夫婦はこの父親の生活だけを保障して、その心の世界については少しも思いやることがなかつたようです。この老人と息子夫婦の間には、まつたく対話がなくなつてゐるのです。この老人はどんなに寂しかつたことでしょう。だからこそ、来る日も来る日も公園のベンチに座つて、誰かが声をかけてくれるのをまつていたわけであります。この話は、現代の日本社会における人間関係の断絶を、みじん

とに象徴しているように思われます。私たち人間というものは、けつして一人ぼっちでは生きられないものです。人間は生きるときには一人で生まれ、死ぬるときに一人で死んでゆかねばなりません。人間はじめも終わりも一人ぼっちなのです。その意味では、人間というものはみんなもともと人ぼっちは存在なのです。しかしながら、人間というものは、一人では生きることができません。そこで人間はいつも懸命に他人と出会いを求める、仲間を作ろうとします。人が生きるということは、誰かと出会い、誰とかかわってこそ、はじめて成り立つてゆわけであります。私たちはおたがいの人生の中でも、この出会いを貴重に思い、それ大切にしてゆきたいのです。

藤元正樹

今月のことばに二度「願い」が出てきます。一つ目は私が起こす願いのことと、阿弥陀如来の浄土に生まれて仏となりたいと願う心のことです。しかし、仏道を好むよりも世俗的な快樂を追求するのみで、さとりを求める心が起ららないのです。仏となる道を求めないもの、浄土に生まれて仏となりたいと願う心が起らせるもの。そのようなものこそが救われていく教えが浄土真宗であり、その教えの中心は阿弥陀如来の願いであると説かれるのです。

二つ目は、阿弥陀如来の願いのことです。仏教の教えには無関心で、私にはまったく関係ないものと決め込んで生きていっても、阿弥陀如来の願いを受けた存在なのです。阿弥陀如来の方的な願いによつて私たちは仏教の教えを聞き南無阿弥陀仏とお念佛申す身となつてゐるのであります。このことは、願いには人を育み成長させる力があることを示しています。

阿弥陀如来の願いに学ぶとき、人は願いなくして生きることができないことを教えられます。私の方からお願いもしていないのに、私のことを探し、一方的に注がれている願いがあることに気づく時、自分の力で生きてきたと思っていたことが、生かされているという受け止めへと変換されていきます。そして、生かされていることに気づく時、生きる事が豊かなものであるという思いが湧き出してくるのではないでしょうか。お願いすることもなく、精一杯生きてきた私ですが、すでに阿弥陀如来の願いを受けているかされている確かさを南無阿弥陀仏によって知らされているのです。（「大乗」より引用）

行事があり、仏教婦人会の役員さんがいつも早めに来て、境内や本堂をきれいにお掃除してくださることに甘えていたのですが、それがないので、ほっておくと草原のような草だらけの庭になってしまふから。そして、寺の行事が中止になれば、それに伴う準備も減るので、私の隙間時間がずいぶん増えたから。なので、ちょっと時間があると手ぐわを持って軍手をはめて、庭に座りこむというわけです。幸い、勝林寺の庭の草は、私が取つても取つても無くなつてしまふ心配がないほどたくさんありますので(笑)、私の充実した草取りの日々は延々と続くことがあります。はじめは、たいてい考え事の片手間に草を取つているのです。夕飯のメニューだつたり、この後のスケジュールだつたり、でも、いつもやつてゐるうちに、それを忘れます。今取つている草の先にある草、またその先にある草と取つていくうちに、次にとる草をたくさんある中のどれにするかそのことだけしか考えなくなります。来客を知らせるチャイムの音や住職の声でふつと顔をあげるまで、私は「無心」になつて草を取つてゐるみたいです。

四

最近、よく草取りをするようになります。染予防のために、寺の行事が減つてしまつたから。例年なら、月に一回は寺の行事があり、仏教婦人会の役員さんがいつも早めに来て、境内や本堂をきれいにお掃除してくださることに甘えているのですが、それがないので、ほつておくと草原のような草だらけの庭になつてしまふから。そして、寺の行事が中止になれば、それに伴う準備も減るので、私の隙間時間がずいぶん増えたから。なので、ちょっと時間があると手ぐわを持って軍手をはめて、庭に座りこむというわけです。幸い、勝林寺の庭の草は、私が取つても取つても無くなつてしまふ心配がないほどたくさんありますので(笑)、私の充実した草取りの日々は延々と続くことになります。草取りをして気づいたことがあります。はじめは、たいてい考え方の片手間に草を取つているのです。夕飯のメニューだつたり、この後のスケジュールだつたり、でも、いつもやつていてるうちに、それを忘れます。今取つている草の先にある草、またその先にある草と取つていくうちに、次にとる草をたくさんある中のどれにするかそのことだけしか考えなくなります。来客を知らせるチャイムの音や住職の声でふつと顔をあげるまで、私は「無心」になつて草を取つてゐるみたいです。

ストレスをためる現代人が多いといいます。そこで進められているのが心を無にする瞑想。しかし、なかなか頭の中を空っぽにすることは難しくて、「呼吸だけに集中する」とか「聞くことを音だけに集中する」と勧められていますが、邪念が入り集中できないのが常です。しかし、草を取ることだけに集中している私は、たぶん瞑想状態です。そのせいか、終わつた後、庭がほんの少し綺麗になつたことも併せて、とてもすつきり気持ちがよくなります。(文責 坊守)